

学籍番号 _____ 名 _____

書名	著者名	出版社
哲学の世界へようこそ。 答えない時代を 生きるための 思考法	岡本 裕一郎	ポプラ社

タイトル (書評のタイトル)	「生き抜く力」を学ぶ 
導入 (読み手に関心を持たせる。)	「何となく哲学は奥深いもので、 読んでみる気が起きない」 そんな人に読んで欲しい本になっている。
著者の紹介 (経歴・実績)	1954年 福岡県生まれ。玉川大学文学部名誉教授。 西洋の近現代哲学を専門とするが、 哲学とテクノロジーの領域横断的な研究をしている。
本の概要・要約 (重要な部分。学んだこと。紹介したいこと。)	「コピペはしてもいいのー」など 現代を生きる人が考えるべき 8つの問いについて 徹底的に考える。
本に対する評価 (感情を動かされた部分、本から得た気づき。 内容に対する自分の意見・反論。)	実際に自分の立場や意見を明確に しなから読み進められたので置いていかれる 感じもなく最後まで読み終えることができる。 筆者が問いを考えるためのステップを提示 してくれるので、読み進めることが容易である。
まとめ	今までは、どうしても固定観念があり、触れることの 少なかった問題についても、これからはしっかりと 自分の考えを出せるように考え抜いていきたい。

新聞、雑誌、書評サイトなどさまざまな媒体で書評が発表されていますが、盗用、剽窃は絶対に行わないでください。
自分で責任を持ち、品位ある書評を書きましょう。

学籍番号

氏名

書名	著者名	出版社
古事記	太安万侶 (訳:池澤夏樹)	河出書房新社

タイトル (書評のタイトル)	古事記から考えたこと
導入 (読み手に関心を持たせる。)	みなさんは古事記と聞いて何を思い浮かべるだろうか。天の岩戸、ヤマトノオロチ、イザナギ、イザナミなど有名な話がいくつか出てくるのではないだろうか。今回はその古事記の書評を書こうと思う。
著者の紹介 (経歴・実績)	まずは太安万侶、古事記のもとを書いた、編纂した人である。(註)彼は飛鳥〜奈良の貴族で苗字が「太」の1文字。もう1人稗田阿礼という人も共に編纂といつか色々な史実を丸暗記してそれを太がまとめたという感じ。池澤夏樹は作家・詩人、毎日出版文化賞など。
本の概要・要約 (重要な部分。学んだこと。紹介したいこと。)	この本に1冊買ったストーリーや主人公はいない。どちらかというとショートショートのような感じであると考えてもらった方がよい。又この本の作られた理由が「天皇の地位を高くする」ためということが大きなものであり、神々の家系図のような役割が主である。全くストーリーでもなんでもない神の名が連なる部分もある。ヤマトノオロチとか因幡の白兔は天皇の祖先か、どれだけ優れていたのかを示す話なのである。一言で表せば古事記は「天皇の尊厳を立てる本」ではないかと考えた。
本に対する評価 (感情を動かされた部分、本から得た気づき。内容に対する自分の意見・反論。)	古事記を読んで私が感じたのは、もの凄く男尊女卑の色が強いということである。例えば古事記には「女の方が先に言葉を発したのかよくなかった」という旨の文があるのだ。他にも出てくる神は男が多いのだ。また注釈等に書かれていたのだがヨーロッパの神話等と似た部分が多く所々あるらしいのだ。この辺りの話を読み人の考え方はどこも似たようなものであったり、今でもなかなか薄れていないんだなあと感じた。
まとめ	日本は男女平等の意識が強いとよく言われるがそれはこの古事記が書かれた時代から至っていたものであり、完全に消え去るのは美しいのだろと考えた。また古事記という物語が今でも登場人物の名ストーリー、バラバラの形でも日本人は聞き覚えがあるということはすごいことだと感じた。

新聞、雑誌、書評サイトなどさまざまな媒体で書評が発表されていますが、盗用、剽窃は絶対に行わないでください。自分で責任を持ち、品位ある書評を書きましょう。

学籍番号

氏名

書名	著者名	出版社
吾輩は猫である	夏目漱石	新潮社

タイトル (書評のタイトル)	不器用な人間 (読生)
導入 (読み手に関心を持たせる。)	みなさんは一番優れている生物は何だと思いますか。たぶん私なら「人間」と答えるかもしれません。しかし人間は思えばより、馬鹿で不器用で何もできない弱い生物。この本は教えてくれます。
著者の紹介 (経歴・実績)	1867年に江戸牛久場下にはまえる。五高等で英語を教える英団に留学しました。帰国後の1905年に「吾輩は猫である」を発表。翌年には「こゝろ」や「草枕」などを発表し大評判となった著者です。
本の概要・要約 (重要な部分。学んだこと。紹介したいこと。)	この本は一人の猫の人生を書いていて、その中で「人間の貪欲さ、弱さ、命のはかたさ」を猫である「吾輩」の視点で包み隠さず率直な意見で書かれています。 日常の風景を通して「吾輩」の飼主やその周囲の人々の滑稽さをおもしろく書いていて、著者が付与する人間の弱さを学ぶことができます。人間は思えばより、何もできません。不器用です。
本に対する評価 (感情を動かされた部分、本から得た気づき。内容に対する自分の意見・反論。)	私は「希冀と見える人々も、心の底を叩いてみると、どこか悲しい音が出る」という文章で、人々はどこか心の中に弱さを抱っていて、隠れていることに気づき「吾輩」の「人間と時折、気の毒に思う」という言葉の先見にとっても共感できました。 そして内気で中にとこもっている人と「牡蠣の根性」と書かれています。豊かな表現力とても面白いと感じました。
まとめ	この本は、少し昔に書かれていますので難しい漢字も多く使われていますが、最初から最後まで楽しく読むことができました。自分と共感できることも多いので、ぜひ読んでほしいです。

新聞、雑誌、書評サイトなどさまざまな媒体で書評が発表されていますが、盗用、剽窃は絶対に行わないでください。自分で責任を持ち、品位ある書評を書きましょう。

学籍番号

氏名

書名	著者名	出版社
思考の整理学	外山滋比古	ちくま文庫

タイトル (書評のキッカケ)	覚えるのに飽きた人に。 
導入 (読み手に関心を持たせる。)	書名の通りに思考の整理を目的とした本。 本を読んだ「読んでいて」というより、実際に話をして聞いているような感じ。
著者の紹介 (経歴・実績)	1923年生まれ。今年で生誕 100年を迎える。 東京文理科大学 英文学科卒業。著書「知的生活習慣」「読書の整理学」
本の概要・要約 (重要な部分。学んだこと。紹介したいこと。)	223pの中に6つの章がありそれぞれに著書が伝えたいこと、重要なことがある。 I. 考える事の重要性、頭が良いを良く考える。 IV. 知識をため、捨てる、整理する。 II. 考えすぎではダメな、休憩も必要。 V. 知識や思考の応用。 III. 思考やその保存についての具体的な提案。 VI. 実体験や歴史からよりよい思考について考える。
本に対する評価 (感情を動かされた部分、本から得た気づき。内容に対する自分の意見・反論。)	高校に入学してから何でも覚えてばかりだった自分に 考える事の大切さを改めて気づかせてくれた本。 特にインプット・アウトプット(同系繁殖)の例えは面白く、同じ分野の 専門家を導くより、様々な分野の専門家を導く方がよりよいアイデア が出るというのは、なんとも皮肉なものであった。 しかしもう40年前の本なので、その考えを鵜呑みにするのは良くない。 自身でしっかりと検証すること、思考の整理 と言えるだろう。
まとめ	一般的に頭が良いとされる私たち 高崎高校の生徒にとって 響く作品だと感じる。40年程前の本だが、現代の社会にも 通ずるものがある。

新聞、雑誌、書評サイトなどさまざまな媒体で書評が発表されていますが、盗用、剽窃は絶対に行わないでください。
自分で責任を持ち、品位ある書評を書きましょう。

学籍番号 _____

氏名 _____

書名	著者名	出版社
サピエンス全史 上・文明の構造と人類の幸福	ユヴァル・ノア・ハラリ 訳：柴田裕之	河出書房新社

タイトル (書評のタイトル)	私たちが「賢きモノ」である理由	
導入 (読み手に関心を持たせる。)	私たちが「サピエンス(賢きモノ)」は、それまでのモノ(人)としての親戚をあいやり、自らを「賢い」と言う、まがしな生物である。	
著者の紹介 (経歴・実績)	ハーバード大学教授	
本の概要・要約 (重要な部分。学んだこと。紹介したいこと。)	・他、人類種を絶滅へ追いや、今や生態系の頂点にいるモノ・サピエンスとして繁栄できたのか？ →虚構を信じるという「認知革命」でそれまでの人間の規格を大幅に超えて意志の統一ができたことにある	
本に対する評価 (感情を動かされた部分、本から得た気づき。内容に対する自分の意見・反論。)	この本は人間に対しての見方が変わる本だと思った。 私たちがサピエンスは自分達のことと動物の一種であるという考えをもつ人は少なく、まるで自身が生態系から脱出したものだと思っている。	しかし、その祖先をたどれば彼らはサベタウで天敵に脅えてくらしていた。そのことをおもひ返すことだ。 「天敵」と「万物の王」たどる。違いはとて大きく見える。それを明らかにするこの本書である。
まとめ	「社会の誕生」と関係づけた本をよんだ。	

新聞、雑誌、書評サイトなどさまざまな媒体で書評が発表されていますが、盗用、剽窃は絶対に行わないでください。自分で責任を持ち、品位ある書評を書きましょう。